

私学の魂

瀧野川女子学園中学高等学校

中高6年間は好きなことに全力投球! 体験型プログラムで身につける 「創造性」と「起業家精神」を強みに 私らしい人生は私の力で手に入れる!

中2の「奄美冒険旅行」や高1の「商品企画コンペティション」といったユニークな体験型プログラムを次々と打ち出している瀧野川女子学園。大正15年の学園創設にあたり、創設者の山口さとる先生が込めた思いは「女性が望むような人生を手に入れることのできる学校づくり」。これが今、「創造性教育」として生徒の能力と個性を開花させています。望む人生を手に入れるために、同校ではさまざまなプログラムを通じて、新しいアイデアを生み出す「創造性」と、そのアイデアを新しい仕事へと結びつける「起業家精神」の育成に力を入れています。

一人ひとりの生徒が好きなことに思いきりチャレンジできるのは、生徒を教えるよりも導くことを重視した「ファシリテーション型教育」で、生徒の成長に教員が寄り添っているから。iPadとクラウドシステムの活用は生徒との関係をより緊密にしています。創立以来「ひとつの家族のような学校」と言われる信頼関係は今も変わることなく、多感な生徒たちに「自分の居場所がある」という安心感を与えています。

人生という先の見えない冒険に踏み出す力を育む瀧野川女子学園ならではの魅力的なプログラムを中心に、副校長の山口龍介先生にお話を伺いました。



副校長 山口龍介先生

マングローブのジャングルを 自力で進むワクワク感! 自然と向き合う「奄美冒険旅行」

89年の歴史の中で、瀧野川女子学園が積極的に取り組んできた1つに、校外学習があります。副校長の山口龍介先生は、「体験を原点とした学びは具体性があり実感を伴うため、自分のものにしやすい。その方が勉強も楽しいはず」と語ります。従来の教科書的な学習は、まず原理・原則から入り、基礎問題、応用問題を解いて最後にようやく現実社会での応用にたどり着きますが、まず実体験から入るのが瀧野川流です。

中でも目を引くプログラムが、中2の「奄美冒険旅行」です。手つかずの美しい自然が残る奄美大島で、生徒たちは都会では味わえないたくさんのことを体験します。たとえばマングローブのジャングルを探検。自分の手でパドルを使い、カヌーを漕いでジャングルという未知の場所を突き進むドキドキ、ワクワクの冒険です。「この体験によって、生徒は未知のものを怖がらなくなります。一步踏み込む勇気を持ち、積極果敢に挑む進取の気質が育まれます」と山口先生は言います。

人と自然の共生を実体験することも、この旅行の大切なテーマの1つです。まず森と滝の歴史の説明を受けてから、カヌーでマングローブのジャングルを巡

り、海へと出ます。このような順番でたどることで、生徒は水がたどる命の循環を観察できます。森が育む養分豊富な水の恩恵は、島で取れる米や野菜、果物、海で取れる魚介類にも及び、生徒たちは見て、食べて実感します。

3泊4日の間、自然の中にいる時間を思いきり満喫しようと、生徒は夜明けとともに浜辺へ飛び出して行ったそうです。潮の満ち引きも、刻々と色を変えていくラグーンも、見るものすべてが新鮮で、生徒の好奇心を大いに刺激したに違いありません。そうした奄美大島での感動を、グループワークでショートムービーにまとめました。みんなで交代しながら撮影し、プログラムの合間を縫って編集して、最終日にお世話になった島のみなさんに発表しました。

注目なのは、帰ってからではなく旅行中にまとめていること。こうしたことができるのは、セルラーモデルのiPadを1人1台持ち、クラウドコンピューティングを活用して、いつでもどこでもみんなで共有できるから。iPadとクラウドコンピューティングは、同校にとってなくてはならないツールとなっています。

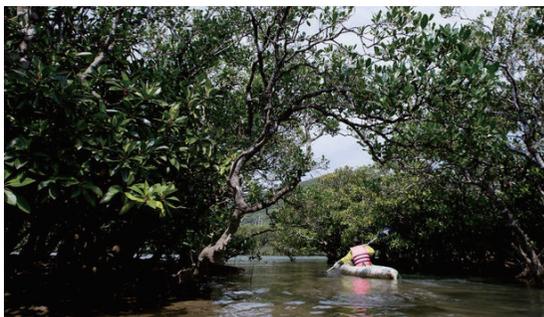
本気になれることを探そう！ 「好きだから」という強い思いが 周りを巻き込む求心力になる

生徒たちが大人になる頃には、今ある仕事の50%程度は新しい仕事に置き換わると言われています。そのような世界で活躍するために、瀧野川女子学園が力を入れているのが、「創造性」と「起業家精神」です。

生徒たちには、「あったらいいな」「できたらいいな」という漠然とした思いを、具体的なアイデアにしようと呼びかけています。同校が掲げる創造性とは、社会にとって有益な「プロダクティブな創造性」です。単に世の中にないからという目新しさだけでは社会に有益であるとは限りません。社会にとって意味のある



高校の修学旅行では、ハワイ大学での交流プログラムを体験します。国際大学ならではのグローバルな環境に一足早く触れることで、進路やキャリア形成への意識を高めます



潮の満ち引きに合わせて流れが変わるマングローブの原生林をカヌーで突き進む冒険の旅。生徒達は自分の手で漕いで原生林の中を進むこと、圧倒的な大自然の存在感を全身で感じ取りました

商品やサービスを提供できればこそ、社会で活躍できるのです。

山口先生は、新しい価値を生み出すアプローチとして、「自分の好きなこと、得意なことを、ぶれない意思をもって徹底的に追求すること」を挙げます。校訓の「剛く、正しく、明るく」の「剛く」とは、自分に対してぶれない意思を持ち続けてやり抜くことを指します。自分が好きなこと、やりたいと思うことなら夢中になって取り組めるはず。新しい価値を見つけることは容易いことではないけれど、好きなことをとことん極めることで道が拓けてくるでしょう。

また山口先生は、アイデアを実社会の仕事に結びつけるには、アイデアを「仕事にする」という意識をしっかりと持つことを強調します。「こんなことができるようになる、みんなが喜ぶ」というだけでなく、さらに一歩進めて、「このアイデアをこのようなカタチで世の中に届けば事業として成り立ちます。私と一緒に仕事をしませんか」というところまでプレゼンテーションできる起業家精神を持った人材を、同校は育てようとしているのです。

事業の青写真を描いて自分の考えをアピールし、協力してくれる仲間を集めるのに必要なのは、「好き



カヌーでマングローブの林を抜け砂浜に上陸。波打ち際で幼木が育ちマングローブの森が広がっていく姿を皆で観察し、水がたどる豊かな生態系の姿を全身で学び取りました



今年度から新入生全員に最新のiPadの本体を無償で配布しています。クラウドを皆で使い、いつでもどこでも、クラスの仲間や先生たちとの協働学習を進めることができます

だから」という熱意です。「だからこそ、人生をかけて本気でやりたいと思えるものに出会えるように、本校では多感な中高6年間でさまざまな体験型プログラムを用意しています。最初は『おもしろそう』という興味でいい。その中から思いきり打ち込めるきっかけをつかんでくれたらと思います」(山口先生)

ビジネスパーソン相手に 真剣勝負のプレゼンを挑む 「商品企画コンペティション」

まさに創造性と起業家精神を身につけるプログラムが、高1の「商品企画コンペティション」です。企業とのコラボレーションを通じて、実社会で働くことの理解を深めるとともに、自分たちの「こんなものがあつたらいいな」という思いを商品やサービスの企画にまで創り上げ、プレゼンテーションすることで、商品企画の一連のプロセスを体験的に理解します。

今年度は、「感動創造企業」を企業理念とするヤマハ発動機販売と共同で商品企画に挑戦します。ヤマハの主力はレジャー事業、売上の9割を海外が占めま



湖面をボートで疾走する喜びにわく生徒達。「こんな乗り物を作ってみたい」と思うところから創造性の扉は開きます

す。余暇のためのものづくりとはどのようなものか、世界で支持されている理由は何かということ、現場で働く人から直接話を聞き、クルーザーに乗せてもらうなどの経験を通して考えます。

実際の商品を目の前にして、「カッコいい!」と生徒は大興奮でした。それまで知らなかった世界を垣間見たことで、世界の広さや仕事の多様さに気づいたことでしょう。感動を生み出す商品を手掛けているのは決して「スーパーマン」というわけではありません。自分が進学したいと思っている大学の出身者だったりすると、「がんばれば自分も人を喜ばせるものづくりに関わることができるかもしれない」と、大学の先にあるキャリアを具体的に思い描くことができます。

最終プレゼンテーションで、瀧野川女子学園の生徒はどんな夢の乗り物を提案するか楽しみです。「ビジネスパーソン相手にプレゼンテーションできる、しかも直にフィードバックが聞けるという経験は、生徒にとって将来の財産になるでしょう。商品企画コンペティションのように、社会とつながるような実践の場を積極的に設けてあげたいと考えています」(山口先生)



小グループに分かれてのディスカッション。新しい商品を創り出すことへのヤマハマン達の熱い思いを聞く生徒の表情も輝いています

生徒に教えるよりも生徒を導く 「ファシリテーション型」教育で 自発的に動ける人材を育てる

これからの社会では指示待ち人間では通用しません。自ら課題を見つけて動ける行動様式を身につけようと、瀧野川女子学園が粘り強く取り組んでいるのが、「ファシリテーション型」のアプローチです。これについて、山口先生は次のように説明します。「教員の役割は、教えること以上に、生徒たちが自分たちで気づき、学び取り、一人ひとりが個性と能力を育てられるように導くことです。その時々生徒の状態をよ



バスケットの本場、アメリカの姉妹校からベサニー・パウマン先生をコーチに迎えたバスケットボール部。姉妹校は何度もオレゴン州のチャンピオンを獲得した強豪校だそうです

く見てあげて、チャレンジを促したり、ヒントを与えたり、生徒が自分で気づくまで待ってあげたり、その生徒に合ったリードをします。そうすることで生徒の能力や個性を最大限に伸ばすことができると考えています」

中には刺激を与えても響かない生徒もいます。ファシリテーション型教育は、場合によっては生徒がやる気になるまで待つこともあります。それだけに時間も手間もかかります。その点は、iPad やクラウドコンピューティングを活用することで効率化が図られ、いままでよりも生徒と向き合う時間をつくれるようになっています。

あきらめそうになっている生徒がいれば、教員はよく話を聞きます。生徒が既に解決策を持っていることがあるので、その場合は教員が後押ししてあげればよい。「できない」と落ち込んでいるのであれば、周りの教員が情報を共有してチームで生徒のケアに当たります。生徒が混乱しないように、チームに保護者も加わり、家庭と学校が一体となって生徒を支えます。

見守られているという安心感からでしょう、卒業生は「学校に私の居場所があると思えた」と言います。



オレゴン州にある姉妹校では、2週間の語学研修ホームステイと、半年または1年の正規留学ができます。この9月から高校2年生が1年間の正規留学に挑戦しており、学園のブログで日々の様子を紹介しています



英語を話せるようになるには、留学が一番の近道です。中学1年生と高校1年生では「プリティッシュヒルズ」での「留学」を体験し、語学学習への意識を高めています

また、入学して学年が上がるに連れて落ち着きが増してくるのは、自己肯定感が高まることで自信がついてくるからでしょう。すると積極的にもなれます。瀧野川の生徒は、あんなことをやりたい、こんなことをやりたいと、のびのびと自然体で学校生活を楽しんでいます。

教育改革に着手して5年。創造性教育の成果は着実に現れています。たとえば、中2の生徒たちが、今年の文化祭でクラスの出し物を紹介する“宣伝CM”を自発的に制作しました。これを学園祭の2日目からYouTubeで流したところ、宣伝効果は抜群でクラスには多くのお客さんが足を運んだそうです。自主性の芽生えは早ければ早いほどいい。中学・高校はいろいろな能力が開花する時期でもあるので、このタイミングで身についた意識や考え方は「一生もの」になります。

創造性教育によって、学力の向上にも好感触を得ています。創造性と起業家精神が身についた上で、学力もついており、将来の選択肢が広がっています。瀧野川女子学園の生徒たちの伸びしろの大きさに、今後の飛躍に期待がふくらみます。



グローバル社会だからこそ、大人の日本女性として大切な心遣いを、「礼法・華道・茶道」を6年間の必修科目として学びます